

ネットワークとしての文法知識

—「地図をたよりに」構文の記述を通して—*

氏家啓吾

keigo5525@gmail.com

キーワード：日本語 「地図をたよりに」構文 構文の意味 使用基盤モデル

要旨

「地図をたよりに、駅まで歩いた」のように、述語のない「XをYに」という形が従属節として主節を修飾し、付帯状況を表す構文がある。これを「地図をたよりに」構文と呼ぶ。この論文は「地図をたよりに」構文の精緻な記述を提示することを目的とする。

まず、従属節と主節の間の意味的関係のパターンとして、従属節が主節の表す事態の〈成立要因〉を表すもの（「～を手がかりに」など）と〈タイミング〉を表すもの（「～を契機に」など）の2種類の意味関係のスキーマが存在することを示す。そして、この構文の事例に多数含まれる慣習的表現に着目し、それらの多くが上位のスキーマに動機付けられているということを主張する。

「地図をたよりに」構文の全体像は、抽象的なパターンだけでなく具体的な表現を含んださまざまなレベルの言語知識が共存するネットワークとして捉えられる。

1. はじめに

日本語には次のように、「XをYに、S」（XとYは名詞句を、Sは主節を表す）という形の表現がある。

(1) 地図をたよりに、人をたずねる。

(2) 同力士は、「体力の限界」を理由に引退届を出した。 (村木 1983)

このように「XをYに、S」において「XをYに」が全体として主節を修飾している構文を「地図をたよりに」構文と呼ぶことにする。X、Yを項に取る述語を欠いている点の特徴である。名詞句XとYの間にはコピュラ文または場所存在文に相当する関係が成り立ち、「XをYに」が全体として主節の表す事態の付帯状況を表す（詳しくは2節で論じる）。

「地図をたよりに」構文「XをYに、S」は多くの場合にほぼ同じ意味で「XをYにして、S」という形に置き換えることができるため、単に「して」が省略されているという見

* この論文は2017年度に東京大学に提出した修士論文の内容の一部を新たにまとめ直したものである。指導してくださった西村義樹先生にお礼申し上げる。また石塚政行さん、田中太一さん、野中大輔さん、萩澤大輝さん、平沢慎也さん、山泉実さんとの議論から多くのことを学んだ。感謝している。

方もある (Martin 1975: 471)。しかし、実際には置き換えられない場合もあり、また「XをYにして、S」という表現のうち「XをYに、S」と置き換え可能なものは限られていることから、「地図をたよりに」構文の事例をすべて「して」の省略と見ることはできない。

「XをYにして、S」に置き換えられないのは次のような場合である (村木 1983)。

(3) 幹部が権力をカサに、女性をかどわかしていながら...

(4) 私達の驚きを尻目に、Iさんはまた喋り出した。 (村木 1983: 269)

上の (3) は「カサにきる」という慣用句がもとになっているため、「XをYにして」に置き換えることができない。また、(4) は「～を尻目に」という表現がひとまとまりのイデオムになっているため、置き換えることができない。

「XをYにして、S」という表現のうち、「地図をたよりに」構文「XをYに、S」に置き換えることができないのは次のような例である。

(5) a. 離れをアパートにして人に貸した。

b. *離れをアパートに、人に貸した。 (寺村 1992: 122)

また、「XをYにして、S」は継起する2つの事象を表す解釈が可能なのに対して、「XをYに、S」は付帯状況の解釈のみを持つことが知られている (Dubinsky and Hamano 2007、桑平 2007)。

以上のことから、「地図をたよりに」構文は「して」の単なる省略と見ることはできない。したがって、「XをYに、S」という表現が1つの構文をなしていると捉えるのが妥当であると思われる。

この論文は「地図をたよりに」構文の精緻な記述を目指す。先行研究として寺村 (1992) や三宅 (2000) などによる分析がある。次節で紹介するように、これらの先行研究で提示されている一般的な規則はこの構文の重要な側面を捉えているものの、そうした一般的な規則では説明できないことも多い。この論文では、そうした抽象度の高い一般化だけでなく具体的なレベルの構文にも目を向けることで、より適切な文法知識の記述が可能になることを示す。「地図をたよりに」構文の知識は、さまざまな抽象度の構文から構成されるネットワークとして捉えられる。

このような見方は、認知文法が提唱する使用基盤モデルに基づく¹。使用基盤モデルによれば、言語を構成する知識の単位はすべて具体的な言語使用 (usage event) から抽出され、ボトムアップに形成されていく。たとえば「あの事件をきっかけに」「指紋を手がかりに」

¹ 使用基盤モデルについては Langacker (2008) 1.3 節、8.1 節を参照されたい。これを推し進めた研究成果として Taylor (2012) がある。特に構文に関しては Langacker (2009) を参照。

といった具体的な表現が使用される場面に出会うことで「X をきっかけに」というスキーマや、より抽象的な「X を Y に」というスキーマが抽出され、言語使用者の頭の中に蓄えられていく。したがって、「地図をたよりに」構文の知識を明らかにするためには、「X を Y に、S」という最上位のスキーマだけでなく、「X をきっかけに」といった下位スキーマを含んだ知識の全体を探究する必要がある。

構成を述べる。第2節では寺村(1992)と三宅(2000)の先行研究を概観する。第3節ではそれらの研究の問題点を指摘し、解決すべき問題を提示する。第4節、第5節では、構文の意味のスキーマとして「成立要因スキーマ」と「タイミングスキーマ」をそれぞれ提案する。第6節では「娘の遺影を胸に」といった保持を表す例について述べる。第7節では「X を Y に」の Y の名詞が特定された慣習的事例が多数存在することを指摘する。第8節は全体のまとめである。

2. 「地図をたよりに」構文の先行研究

2.1 寺村(1992)による一般化

寺村(1992)は、「X を Y にして、S」に対応する「X を Y に、S」が可能な場合について一般化を試みている。まず、「X を Y に」の Y の位置に生起する名詞が限られているということを指摘した。たとえば「舞台」や「会場」といった名詞は Y の位置に生起するが、「部屋」「空間」といった名詞は生起しない。あえて作例するなら次のような文になる。

(6) 第1会議室を{舞台/会場/*部屋/*空間}に、懇親会を行った。

ここから、「Y は本来的に「何かの Y」であるような性格をもった名詞でなければならない」(寺村 1992: 123)と主張した。加えて、名詞句 X・Y と主節(S)の関係について、これらの間に「X が S の Y だ」という関係が成り立つと主張した(寺村 1992: 123)。たとえば(2)「同力士は、「体力の限界」を理由に引退届を出した」では、「「体力の限界」が、同力士が引退届を出した理由だ」という関係が成り立っている。つまり、主節が Y を修飾し、X と Y の間にコピュラ文の関係が成り立つ。

また寺村は、村木(1983)による次の例を挙げて、主節の主語の身体部分を表す名詞が Y に来る場合には「X が S の Y だ」という関係にはならないということも付け加えている。

(7) 母親が、娘の遺影を胸に持参金廃止を訴えた。(村木 1983: 285)

この例では「娘の遺影が胸だ」という関係は成り立っていない。そうではなく、主節の主語の指示対象がその身体部分 Y のところに X の指示対象を保持しながら主節の表す行為を行うという意味になる。多くの場合には「X が Y だ」という意味関係が成り立つが、Y

に身体部位が来るときにはその関係は成り立たず、X を保持しているという意味になるのである（このようなタイプについては6 節で扱う）。

2.2 三宅（2000）の一般化および「非飽和名詞」

この構文の Y の位置に生起する「本来的に「何かの Y」であるような性格をもった名詞」を寺村は「帰属性の名詞」と呼び、「本来的に何かに属する、あるいは何かについての、何かに対する実体、あるいは観念を表す名詞」（寺村 1992: 124）と特徴づけている。三宅（2000）はこれが「非飽和名詞」と呼ばれるものと一致するということを指摘した。非飽和名詞とは、「「X の」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延（extension）を決めることができず、意味的に充足していない名詞」（西山 2003: 33）である。たとえば「作者」という名詞は、「あの本の作者」というように、「～の」に当たるものを参照しなければ、ある人が作者かどうか言うことができない。このような関係があるときに、「作者」を非飽和名詞といい、「あの本」に当たる要素をパラメータの値という。「地図をたよりに」構文の Y の位置に出てくる名詞は非飽和名詞に限られるのである。

その上で、三宅（2000）は次のような例を挙げて寺村の一般化を批判している。

- (8) 天ぷらと刺し身を肴に、日本酒を酌み交わした。
- (9) 包装用のプラスチックを素材に作り上げたこの作品

これらの例に関して、寺村の主張する S が Y を修飾する関係は成り立っていないと三宅は主張する。「日本酒を酌み交わした肴」「この作品を作り上げた素材」という表現は容認できないからである。そうではなく、これらの例において成り立っているのは「日本酒の肴」「この作品の素材」という関係である。このことを根拠にして、「この問題は、“S の Y” というような主節 “S” そのものが “Y” を修飾するというような関係ではなく、主節 “S” の中のいずれかの項が “Y” を修飾するというような関係を仮定すれば、解決する」（三宅 2000: 82）と主張し、次の一般化を提案している。

- (10) 「X を Y に、S」の成立条件

Y は S のいずれかの項から修飾を受けるという関係が潜在する。

Y は S の中のいずれかの項と同一指標を持つ空の代名詞 (pro) の限定を受けており、その空の代名詞は Y が [-飽和性] の場合にのみ認可される。すなわち、次のような構造をなす。

X を (pro_i の) Y に、[s ... Arg_i ...]。 ("Arg" は "項" を表す)

(三宅 2000: 81)

つまり、Y のパラメータを埋めるのは、主節 S ではなく主節に項として含まれる名詞句で

あるということである。このように考えることで (8) (9) の例が説明できるという。「日本酒の肴」「この作品の素材」というパラメータ・非飽和名詞の関係が成り立っているのも、これらの例が認可されることになる。

この構文の成立に関して、名詞 Y と主節そのものの内容との関係に注目する寺村 (1992) の立場と、名詞 Y と主節の項との関係に注目する三宅 (2000) の立場があると言える。

3. 問題提起

第 3 節では、まず三宅 (2000) の議論にいくつかの問題があることを指摘し、寺村 (1992) の一般化の有効性を確認する (3.1)。その上で、寺村の説で説明できない事例があることを指摘する (3.2)。

3.1 名詞 Y と主節の関係

たしかに三宅 (2000) の主張する通り、この構文の事例の中には対応する「S の Y」という言語表現が容認できないようなものもある。しかしだからといって、パラメータの値を埋めるものを主節の項だけに限定することには問題がある。

前提として、非飽和名詞にはパラメータとして「モノ」を取るものと「コト」を取るものがある。「妹」「作者」「主人公」といった非飽和名詞はモノをパラメータに取るが、「犯人」「原因」といった非飽和名詞はコトをパラメータに取る (山泉 2010、2013)。本稿では以下、非飽和名詞のパラメータの値を埋めるモノをその非飽和名詞の参照物、パラメータの値を埋めるコトのことを参照イベントと呼び、非飽和名詞の指す事物をプロフィール²と呼ぶことにする。非飽和名詞の参照イベントは「財布を盗んだ犯人」「事故が起きた原因」のように節によって埋めることもできる³。

この点を踏まえて例文を見ると、上述した三宅 (2000) の成立条件 (10) は妥当でないということがわかる。山泉 (2013) は、次の例文を挙げて三宅に反論している (2 を再掲)。

(11) 同力士は「体力の限界」を理由に引退届を出した。 (= (2))

この構文が成立するのは主節の中のいずれかの項が Y を修飾する関係がある場合であるという三宅 (2000) の主張に反して、この例では「同力士の理由」や「引退届の理由」とは言えない一方、「同力士が引退届を出した理由」とは言える。「理由」は参照イベントを要求する名詞であり、この文では主節「同力士が引退届を出した」の表す出来事が参照イベントになっているのである。これを根拠にして山泉は、「地図をたよりに」構文は寺

² プロファイルは認知文法の用語で、ベース (ある言語表現が喚起する概念内容) と対になる。概念上の指示対象と定義される (Langacker 2008: 3.3 節)。たとえば、名詞「妻」は婚姻関係にある男女の組をベースとし、そのうちの女性の側をプロフィールする。本稿では男性の側を参照物と呼ぶ。

³ 「事故が起きた原因」のような外の関係の相対的補充と呼ばれる連体修飾節は、非飽和名詞の参照イベントを表す節だと考えることができる (山泉 2010)。

村の条件と三宅の条件のどちらかの条件を満たしていればよいと結論付けた。

三宅（2000）が（10）を提案した背景には、2つの想定があったと思われる。1つは、非飽和名詞のパラメータの値は名詞句によって埋められるものだという想定である。コトをパラメータにとる非飽和名詞もあるという事実は山泉（2010）が明らかにしたことであり、三宅（2000）の時点では想定されていなかったのである。もう1つは、身体部位名詞も非飽和名詞に含まれるという想定である。たしかに、身体部位名詞を非飽和名詞に含めない立場では、「XをYに」のYに身体部位名詞が来る例を非飽和名詞が来る場合とは別の原理で扱わなければならない。三宅（2000）は身体部位名詞を非飽和名詞だと考える事でより広い一般化ができると考えたのだと思われる。しかし、Yに身体部位名詞が来る場合には保持の意味になり、非飽和名詞が来る場合とは文の意味が大きく異なる。そのことを考慮すると、身体部位を非飽和名詞に含めることにより成立条件に関してより広い一般化が達成されたとしても、意味においては身体部位がYに来る場合を別扱いしなければならない。（意味と形式が対になった）構文の知識としてはどのみち別に記述する必要がある、この点に関して（10）の抽象的な一般化では不十分である。

事実を観察すると第4節と第5節で示すように、主節の表す事象の内容が文の成否を決定するということがわかる。たしかに主節の項名詞句が非飽和名詞Yの参照物となっていると言える場合もあるものの、そのような場合でも主節の表す事象が成否に関わる。主節の項との関係だけに注目してしまうと、主節の表す事象がこの構文の意味に関わっているということが捉えられなくなってしまう。したがって、主節の表す事象に着目する寺村（1992）の一般化が有効である。三宅（2000）のデータは4.5で改めて考察する。

3.2 過剰な一般化

寺村の一般化を、非飽和名詞という概念を用いて述べ直すと次のようになる。

(12) 「地図をたよりに」構文「XをYに、S」において

- a. 名詞Yは非飽和名詞であり、主節Sがその参照イベントを表す。
- b. 「XがYだ」という意味関係が存在する。

(11)のような例はこれで十分説明できる。ただし、多くの例を視野に入れるとこの一般化では不十分な点がある。第一に、(12)の条件を満たしていても適格にならない場合が多くある。第二に、(12)の条件に当てはまらないにもかかわらず適格になる反例が存在する⁴。以下では前者の場合、つまり(12)の条件に当てはまっているにも関わらず「地図

⁴ 条件に当てはまらないにもかかわらず適格になるものとして、たとえば次のような実例がある。Yの位置の名詞「杖」が非飽和名詞ではないが容認される。こうした例については氏家（2017）で論じた。

(i) 穂先が折れ欠けた槍を杖に、大助は父の前へ歩み寄り、笑いかけた。（『真田太平記』BCCWJ）

をたよりに」構文が成立しない場合を論じる。

非飽和名詞であっても、「XをYに」のYの位置に生起しないものも多い。次のような名詞は非飽和名詞であるにもかかわらず、この構文のYに来ることはない。

(13) 足かせ、反動、結果

また、Yに同じ非飽和名詞が来ている場合でも、主節が表す内容によって不適格になることがある。次のペアはどちらも条件を満たしているにもかかわらず、容認性に差がある。

(14) a. 探偵を主人公に、ハードボイルド小説を書いた。

b. *探偵を主人公に、ハードボイルド小説を読んだ。

非飽和名詞「主人公」のパラメータは「ハードボイルド小説」によって埋められている。主節の内容によって、(14a)は自然だが(14b)は不自然になる。

以下ではこれらの問題を、「構文の意味」を想定することで解決する。具体的には、従属節（「XをYに」部分）と主節の意味的關係が特定のパターンに当てはまる場合に成立すると論じる。

4. 成立要因スキーマ

寺村は、この構文を「Sという事態を報ずると共に、それに付带的に、「そのSのYがXである」ことを述べる」ものであると特徴付けた（寺村1992:123）。従属節と主節の意味的關係に関しては、「付帯状況」という抽象的意味だけを考えているのである。しかし、この構文の従属節と主節の間にはより特定の意味的關係のパターンがあると考えられる。「付帯状況」であれば何でも良いわけではなく、従属節と主節の意味上の關係が構文の知識に含まれている。以下で「地図をたよりに」構文が持つ「構文の意味」として「成立要因スキーマ」と「タイミングスキーマ」を提案する。

まず、4.1で成立要因スキーマを提示する。4.2と4.3で構文の意味スキーマに合致する意味を持つ名詞はこの構文と特に相性が良いが、それに反する意味を持つ名詞は相性が悪いということを示す。4.4では「もとなるもの」を表す名詞や「主人公」といった名詞が使われる場合を検討する。4.5では三宅（2000）で寺村への反例として挙げられた例について成立要因スキーマを用いて改めて説明する。

4.1 成立要因

第一の構文の意味スキーマとして、次の成立要因スキーマを想定する。

(15) 成立要因スキーマ「XをYに、S」において、従属節「XをYに」の内容が、主節

の表す行為の成立要因になる。

「成立要因」とは、それがあることである行為が可能になったり、容易になったりする物や事とする。この構文的意味を想定することで、いくつかの観察が説明できる。次の例では、「足あと」の指示対象が主節の表す行為の成立要因になっている。「足あと」という手がかりがあるおかげで、「捜査を進める」ことができるのである。この意味で、「足あと」の指示対象が主節の行為の成立要因となっていると言える。

(16) 犯人の足あとを手がかりに捜査を進めた。

次の例も同様である。「地図」の指示対象が主節の表す行為の成立要因となっている。

(17) 島村は翌日、さっそく地図をたよりに朝田という犬屋を訪ねた。

(『犬バカものがたり』BCCWJ から)

村木 (1983) の次の例も同様である。

(18) 同力士は、「体力の限界」を理由に引退した。(= (2))

4.2 成立要因スキーマに合致する意味を持つ名詞が生起する場合

非飽和名詞の中でも、そのプロファイルが参照イベントの成立要因になるような非飽和名詞、つまり成立要因スキーマに合致した意味をもつ非飽和名詞はこの構文によく出てくる。例を挙げよう。

(19) 先生の言葉をヒントに、修論を書き上げた。

(20) この英国での最初の成功を足がかりに、デルコンピュータはその後数年間でドイツ、フランス、スウェーデン、カナダに子会社を設立し、.....

(『ザ・ブランド： 世紀を越えた起業家たちのブランド戦略』)

(21) 政府の支援を追い風に海外進出への第一歩を踏み出せ！

(https://japan.cnet.com/extra/tvs_201708/35105851/)

「足がかり」「ヒント」「追い風」は成立要因スキーマに合致した意味を持つ。つまり、非飽和名詞のプロファイルが参照イベントの成立要因になるということである。このことは「足がかりがなくて事業拡大できなかった」「ヒントがなくて解決できなかった」「追い風がなくて海外進出できなかった」のように自然に言えることから確かめられる。

構文の意味として成立要因スキーマを想定することに対して次のような反論があるかも

しれない。成立要因という特徴は「手がかり」「ヒント」といった名詞の意味に含まれているのだから、構文そのものに帰すべきではない、という反論である。たしかに、「手がかり」「たより」「理由」という名詞の意味の中にそれらの語のプロファイルが参照イベントの成立要因になるということが含まれている。

しかし、だからといって構文が成立要因の意味を担っていないということにはならない。なぜなら、構文の意味とその中で使われる語の意味がオーバーラップすることはよくあることだからである。たとえば、“He sent a birthday present to his daughter.” のような英語のいわゆる使役移動構文 [VNPP] は、目的語の指示対象を前置詞句の表す経路に従って移動させるという構文の意味を持つとされるが、そのことは文中に生起する *send* という語が同じく目的語の指示対象を移動させるという意味を持つことと矛盾するものではない。

むしろ、構文の知識は具体的な語を含んだ使用に繰り返し触れることで抽出されること、下位の構文知識の方が上位の構文知識よりも基本的な単位であることを考えれば、そのようなオーバーラップはごく自然なことである。したがって、「地図をたよりに」構文が成立要因というスキーマ的な意味を持っているからこそ「手がかり」「たより」「理由」などのそのスキーマに沿った意味を持つ名詞は特にこの構文と相性がいいのだと言える。

4.3 成立要因スキーマと衝突する意味を持つ名詞が来る場合

以上、成立要因スキーマに合致する意味をもつ非飽和名詞がこの構文の Y の位置に生起しやすいことを確認した。一方、成立要因スキーマとは逆の関係を表すような非飽和名詞、つまり、プロファイルが参照イベントの結果となるような性質をもつ非飽和名詞は、この構文に生起しない。たとえば「結果」は、原因と結果の関係の中で、原因にあたるものを参照イベントとして、結果の方をプロファイルする。(12) の一般化ではそうした名詞が Y に来た場合にも文が成立することを予測してしまうが、実際には容認性が低くなる。

- (22) *不合格を結果に、司法試験を受けた。
- (23) *国内景気の後退を反動に、消費税を上げた。
- (24) *グループ解散を結論に、何度も話し合った。

これらの例では、Y の位置に非飽和名詞が使われていて主節がその参照イベントとなっている（「司法試験を受けた結果」）ので、寺村の条件 (12) を満たしているにもかかわらず、容認できない。これは成立要因スキーマに反しているからであると考えられる。「地図をたよりに」構文の意味に成立要因スキーマに沿った従属節と主節の関係が含まれていると考えれば、それに反する名詞を使った文が不適格になることを説明できる。

さらに、成立要因の反対の意味を持つ非飽和名詞、つまり、参照イベントを阻害・阻止するような事物をプロファイルする非飽和名詞も、この構文に生起しづらい。

(25) ??お金がないことを足かせに、海外旅行に行けない。

「足かせ」のプロファイルはある行為を阻害するような物事であり、成立要因スキーマと衝突する。同じ「足かせ」という語を使っても、それが主節の行為を成立させる道具として解釈される文脈では次の例のように容認可能になる（この例は田中太一氏による）。

(26) キーホルダーを足かせに、小鳥を繋ぎ止めておいた。

以上、成立要因スキーマに合致するような意味を持つ名詞はこの構文と相性がいいこと、そして成立要因スキーマと衝突するような意味を持つ名詞はこの構文と相性が悪いことを確認した。

4.4「もとになるもの」を表す名詞が来る場合

ここまで見てきたのは、Yの名詞がコトをパラメータに取る非飽和名詞である場合であった。次の例のように、モノをパラメータに取る非飽和名詞が生起する場合もある。

(27) 日本武道館は千九百六十四年開催の東京オリンピック柔道の会場として建設され、法隆寺の夢殿をモデルに造られています。 (Yahoo!ブログ BCCWJ から)

(28) 以後、これを底本に、さまざまなバリエーションの絵巻物が登場します。

[筆者注:「これ」は「北野天神縁起絵巻」を指す] (西日本新聞 BCCWJ から)

(29) もともと、日本の産業界というのは、外国からモノを持ってくる、それを見本に同じものをつくりだす、ということから始まっていて、いまでも、それが半ば体質のようになっています。 (『わが友本田宗一郎』BCCWJ から)

「見本」「モデル」「底本」という名詞は、「もとになるもの」を表す非飽和名詞とまとめることができる。このような「もとになるもの」を表す名詞も、成立要因スキーマに一致した意味を持っていると言える。

例(27)の従属節部分は「法隆寺の夢殿が日本武道館のモデルだ」という内容を表している。「モデル」はパラメータにモノを取る名詞で、ここでは「日本武道館」がパラメータの値をうめている。ここにはプロファイル(法隆寺の夢殿)がパラメータの値(日本武道館)のもとになっているという関係がある。もとになるという関係は、成立要因スキーマの一種と考えられる。法隆寺の夢殿があるからこそ日本武道館がこのような形で建設されたと言えるからである。「モデルがなかったので、作れなかった」という表現が自然であることから、「モデル」は成立要因スキーマに合致した意味を持っていると言える。「モデル」「底本」「見本」の他にも、「モチーフ」「基盤」「材料」「母体」「下敷き」「前身」「土台」など、もとになるものを表す非飽和名詞は多い。そしてこの種の名詞は

「地図をたよりに」構文ときわめて相性がいい。

このような例に関して、「主節Sが非飽和名詞Yの参照イベントを表す」という（寺村の説に基づいた）特徴付け（12）は一見、問題があるように思われる。たとえば（27）の文の後半部分に対応する能動文「法隆寺の夢殿をモデルに、日本武道館を造る」において「モデル」のパラメータの値を埋めているのは「日本武道館」というモノであって主節の表すコトではない、という問題である。しかし、このような場合にも、主節の表す事象が参照イベントになっていると言っている。

モノをパラメータに取る非飽和名詞がYの位置に来る場合は、主節の内容に特徴がある。そのような場合の主節には、パラメータの値の指示対象の作成や出現を表す内容が来るのである。「法隆寺の夢殿をモデルに、日本武道館を造る」でも、主節の内容が「モデル」の参照物である「日本武道館」を作る行為になっている。（28）、（29）でも「登場する」「つくりだす」と、いずれも作成・出現を表すものである。したがってこのような場合にも主節のイベントの内容が、文の成否の条件に関わっているのである。このことから次のように考えるのが妥当だろう。「もとになるもの」は何かを作成することにおいては成立要因である。そして作成イベントを表す文において「もとになるもの」を表す非飽和名詞が使われる場合には、その作成イベントが非飽和名詞の参照イベントになる。つまり、（27）における「モデル」では、主節が表すイベントが非飽和名詞「モデル」の参照イベントになっているのである。

また、それほど例は多くないが、モノをパラメータに取る、「もとになるもの」以外の非飽和名詞がYの位置に来る「地図をたよりに」構文も作れる。明確な例が次のようなものである。「主人公」にはもとになるという意味は含まれていない。

（30）探偵を主人公に、ハードボイルド小説を書いた。

「主人公」は、物語をパラメータに取る。したがって、パラメータの値（あるいは参照点）になっているのは「ハードボイルド小説」という名詞である。この場合にも、主節の表す事象が参照イベントになっていると言える。次に示すように、主節の表す事象は作成・出現に限られる。「ハードボイルド小説」がパラメータになる場合には、主節の表す事象が「書いた」「構想した」といった作成に関するものである場合には適格になるが、それ以外の場合には不自然になる。

（31）探偵を主人公に、ハードボイルド小説を{書いた／構想した／*見つけた／*読み終えた／*持っている}。

この現象も「モデル」などと同じように、作成の出来事の中ではモノをパラメータに取る非飽和名詞であっても、作成イベントを参照すると考えれば説明がつく。そして、物語作

品を作成することにおいては主人公は不可欠である。つまり作成イベントの成立要因になっているのである。「父」「母」という親族名称がYに来る場合もある。

(32) ナンシーは、舞台女優を母に、セールスマンを父に生まれた。

このような表現はイディオム的な表現であるが、この場合にも、主節が出現（誕生）を表すものになっている。主節の動詞を入れかえると成立しなくなる。これも成立要因スキーマで説明できるだろう。「主人公」や「母」「父」が、これらの例の状況では「もとなるもの」とみなされ、主節の事象の成立要因となっているのである。

4.5 三宅（2000）のデータの検討

以上4節では、寺村の説をもとにした一般化（12）を修正するために成立要因スキーマを想定することを提案した。ここまでの議論を踏まえて、三宅（2000）が寺村への反例として挙げている例を再考し、成立要因スキーマによって説明できるということを示す。

第2節で紹介したとおり、三宅は次の例を挙げ、「日本酒を酌み交わした肴」と言えないことからこれが寺村の一般化の反例になると主張した。

(33) 天ぷらと刺し身を肴に、日本酒を酌み交わした。 (= (8))

そして「この問題は、“SのY”というような主節“S”そのものが“Y”を修飾するというような関係ではなく、主節“S”の中のいずれかの項が“Y”を修飾するというような関係を仮定すれば、解決する」（三宅2000: 82）と述べる。

これに似た表現はこの構文によく見られる。「つまみ」「おかず」「お供」などの名詞を使った次のような表現である。

(34) 私たちの向かい側では4～5歳の子供が、刺身をおかずにご飯を食べていた。

（『おとなの週末』BCCWJから）

(35) ひとりでカニをつまみに地元のワインを飲んでいると、いよいよアゴスティネットが、ヴァルドッピアーデネ地方の〈プロセッコワインの王子〉が、店に入ってくるのが見えた。

（『海をゆくイタリア』BCCWJから）

(36) ビールは乗車前に飲んだので、ワインをお供に大好きな鶏肉、一気に眠くなりました（笑）。

（Yahoo!ブログ、BCCWJから）

「おかず」という名詞の意味において、ご飯を食べるという行為との関係が重要である。ご飯と何かを一緒に食べ、その何かが美味しければご飯がよく進む、そういうもののことを「おかず」というのである。「つまみ」「お供」も同様に考えられる。したがって、(34)

の文では「ご飯を食べる」というイベントが非飽和名詞「おかず」の参照イベントとなっていると言える。そして「おかずが無いのでご飯が食べられない」と言えることからわかるように、ここには成立要因の関係がある。

三宅（2000）の例文（33）における「肴」も同様に酒を飲む行為との関係を考慮する必要がある。肴があると酒が進むという知識は、「肴」という語の意味の重要な側面である。したがってここでも「日本酒を酌み交わした」という主節の表すイベントが、非飽和名詞「肴」の参照イベントとなっていて、しかも成立要因の関係があると言える。

それを支える証拠として、主節の項として「日本酒」が出てきていても、主節が表すイベントが「肴」に関連付けられている行為でなければ、次のように不自然な文になる。

(37) *天ぷらと刺身を肴に、日本酒を{運んだ／買った／こぼした}。

もし三宅の主張（10）のとおりに「主節“S”の中のいずれかの項が“Y”を修飾するというような関係」があればよいのであれば、主節に項としてパラメータの値となる「日本酒」が出てきていることから、自然になるはずである。しかしこの文は不自然であるし、「つまみ」「おかず」等に対しても対応する文は不自然になる。

(38) *カニをつまみに地元のワインを運んでいると、...

このことから、主節の表す事象が文の成否を決定するという寺村の説が正しいことがわかる。

三宅は「酒を酌み交わした肴」という連帯修飾構文が言いにくいことからこれが寺村の一般化の反例になると主張しているが、この議論が成り立つためには節が非飽和名詞のパラメータを埋めるならば必ず連帯修飾構文が成立するという前提が必要である。しかし、「地図をたよりに」構文にも連帯修飾構文にもそれぞれ独自の制限がある以上、非飽和名詞と参照イベントの関係が成り立っていれば必ず連体修飾構文が言えるというような厳密な対応関係を仮定する根拠はない。「酒を酌み交わした肴」という表現がどうしても不自然になるのかという点は現時点では説明できないが、連体修飾構文の研究によって明らかになることが期待される。「肴」が酒を飲む行為との関係で理解される名詞であることを考慮すれば、(33)においては主節の表すイベントが非飽和名詞「肴」の参照イベントになっていると分析することが妥当だと思われる。

三宅（2000）で挙げられているもう1つの例文、「素材」が使われた次の例に関しては、4.4で述べた「モノをパラメータに取る非飽和名詞がYに来る場合は主節が作成・出現を表す」という一般化に当てはまる。

(39) 包装用のプラスチックを素材に作り上げたこの作品

(= (9))

この例でも（名詞修飾に埋め込まれているが）主節が「作り上げる」という作成イベントを表している。これはこの文の成立に主節の表す内容が関わっていることの証拠でもある。したがって、この例も本稿の議論にとっては問題にならない。

以上、三宅（2000）が寺村の説への反例として挙げた例文を、ここまでの議論にもとづいて分析した。その結果、この2つの例文は反例にはならず、成立要因スキーマによって説明可能であることがわかった。

5. タイミングスキーマ

次のような例はどのように扱ったらよいだろうか。

- (40) 文庫版刊行に関する二人の対話は十月二十八日を最後に終わった。

（『エンゲルス論』BCCWJ から）

まず、この文は成立要因スキーマには当てはまらない。また、主節が非飽和名詞の要求する参照イベントになっていない。すなわち、「対話が終わった最後」という関係ではなく、「（何度が行われた）対話の最後」という関係なのである（「十月二十八日を最後に対話を行った」とは言えない）。

そこで、この節ではもう1つの構文の意味スキーマとして次のようなスキーマを想定する。

- (41) タイミングスキーマ「XをYに、S」において、Xが主節の表す事象のタイミングを表す。

次のような例がこのスキーマに当てはまる。

- (42) 二千年春、ネットバブルの崩壊をきっかけに、米国市場の株価は暴落し低迷し続けている。
（『日米技術覇権戦争』BCCWJ から）

- (43) この一報を皮切りに、世界貿易センタービル北棟から緊急通報の九百十一番が殺到し、...
（『9・11、Japan』BCCWJ から）

- (44) 中学生たちのパトカー射撃事件を契機に、警察は少年たちの溜り場である娯楽センターを閉鎖。
（『ぴあシネマクラブ外国映画編』BCCWJ から）

- (45) 個人的武勇では傑出した呂布を滅ぼし、ますます威勢を強める曹操にクーデタが計画され、これを機に劉備と曹操は決裂し不具戴天の仇敵となる。

（『三国志演義2』<https://books.google.co.jp/books/about/html?id=Y26BLQAACAAJ>）

- (46) これをさかいに、「ラ・ピスト」は「明日のサーカス・フランス協会」と名称を変

える。

(『サーカス』BCCWJ から)

名詞句 X が主節の事象のタイミングを表している。たとえば (42) では「ネットバブルの崩壊が(暴落の)きっかけだ」という関係が成り立っていて、名詞句 X (ネットバブルの崩壊) が主節の表す事象(暴落)のタイミングを表している。

このタイミングスキーマを想定することで、「最後」の例 (40) を理解することができる。

(47) 文庫版刊行に関する二人の対話は十月二十八日を最後に終わった。 (= (40))

まず、この場合でも「X が Y だ」という関係は成り立っている。「十月二十八日が最後だ」という関係である。それに加えて、「X が主節のタイミングを表す」というタイミングスキーマを考慮すると、この文がどうしてこのような意味になるのかが理解できる。

また「X を頂点に」「X をピークに」「X を底に」といった表現についても、タイミングスキーマを考慮しなければ意味を導き出せない。

(48) また、特殊学級の在籍者数は、昭和四十八年度の十三万四千人を頂点に、以後減少してきている。 (『青少年白書』)

(49) 公営パーキングで予想外の出迎えを受けた時をピークに、感情のレベルは右肩下がりのラインを描いていた。 (『異界の森の夢追い人』)

(50) また、受注残高も前期末の二千五百五十九億円を底に、二千七百三十三億円と増加しています。 (『エコノミスト』)

このように、タイミングスキーマも構文の意味として言語知識の一部になっていると考えられる。成立要因スキーマの事例では主節の内容が主語の指示対象の行為だと述べたが、タイミングスキーマの事例は上記の例のように行為ではなく非対格自動詞で表されるような非意図的な事象である場合が多い。

以上、「地図をたよりに」構文の意味のスキーマとして成立要因スキーマとタイミングスキーマを提案した。先行研究の抽象的な規則だけでは説明しきれない例があるが、このような中間的な意味関係のスキーマを想定すれば説明できることを示した。

なお、成立要因スキーマにもタイミングスキーマにも当てはまらない例もある。「若い女性を中心に流行している」といった「X を中心に」という表現は慣習化が進み、特異性を示す。また「X を筆頭に」など静的な状況を描写する例についても、さらなる研究が必要である。次節では保持を表すタイプについて考察する。

6. 保持を表すタイプ

2 節で述べたように、寺村は自身の一般化の例外として保持を表すタイプを挙げている。この節では、保持を表す場合について簡潔に触れておく。

次のように、「X を Y に、S」の Y の位置に身体部分を表す名詞が生起する場合がある。その場合には主節の主語の指示対象がその身体部分 Y のところに X の指示対象を保持しながら主節の表す行為を行うことを表す。

(51) 母親が、娘の遺影を胸に持参金廃止を訴えた。 (村木 1983: 285)

(52) …如何にも身軽な若い人達がゲウエル銃を肩に、一糸乱れず駆足で出て来る。
(『おとこ鷹』BCCWJ から)

(53) 列車のチケットを片手に、自分の座席を探した。
(『トホホなベトナムのほほんラオス』BCCWJ から)

名詞句 X と Y の間の関係に着目して整理すると、前節で論じた非飽和名詞が Y の位置に来る場合には「X が Y である」というコピュラ文に相当する関係が成り立っているのに対して、上の例のように身体部分名詞が Y の位置に来る場合には「X が Y にある」という場所在文に相当する関係が成り立っていると言える。

このことから、Y に来る名詞のタイプと「X を Y に」の意味との関係について、さしあたり次のようにまとめられる。

- (54) Y が非飽和名詞 → 「X が Y である」という関係を表す
Y が身体部位名詞 → 「X が Y にある」という関係を表す

しかし、次のような例に目を向けるとこの整理が不十分であることがわかる。

(55) 彼女は生徒たちを前に、「それでは始めます」といって、模範演技を開始した。
(『そば往生』BCCWJ)

(56) 驚く私たちを目の前に、サウンダーズ博士は、両手の掌を握りしめ、二つのこぶしをつくった。(『大量絶滅』BCCWJ)

(57) ヒンドゥー教の石窟寺院で有名なエレファンタ島を右手に、インド海軍艦艇に碇泊する波静かな湾内に小型ボートを乗り入ると、
(『インドの大地で』BCCWJ)

これらの場所を表す非飽和名詞が Y に来る例においては、身体部位名詞ではないにもかかわらず「X が Y にある」という場所関係が成り立っている。たとえば (55) において「生徒たちを前に」は「生徒たちが (彼女の) 前にいる」という場所関係を表している。したがって正しくは次のようになる。

- (58) Yが物や事を表す非飽和名詞 → 「XがYである」という関係を表す
 Yが場所を表す非飽和名詞 → 「XがYにある」という関係を表す
 Yが身体部位名詞 → 「XがYにある」という関係を表す

このように、「XをYに、S」におけるXとYの関係は、Yに来る名詞が身体部位名詞または場所を表す非飽和名詞である場合に、場所関係として解釈されるのである。この事実、身体部位名詞が場所名詞として解釈されていると捉えることもできる。実際、日本語の身体部位名詞は「ここ」「どこ」で指せるなど、場所性を持つことが知られている（田窪 1984、和氣 2000 などを参照）。

7. 慣習的事例と動機付け

ここまで、「地図をたよりに」構文の一般性のある側面に注目して論じてきた。成立要因スキーマとタイミングスキーマは、どちらも一般的なスキーマである。「地図をたよりに」構文は（Yに名詞を入れて新規な表現を作ることができるという意味で）生産性があると言えるが、慣習的事例、つまり、Yに特定の語彙項目が入った形でまると記憶されている事例も多く存在する。7.1 でそうした慣習的な事例を挙げ、7.2 でそれらが中間的なスキーマに動機付けられていると論じる。

7.1 慣習的事例

7.1.1 この構文でしか使われない語を含んだ事例

たとえば次の例のように、「Xを尻目に」という表現はよく使われるが、構文から離れて「尻目」という語だけを取り出すと馴染みがない。

- (59) 私達の驚きを尻目に、Iさんはまたしゃべりだした。 (村木 1983: 269)

「尻目」は「地図をたよりに」構文の中ではよく使われるが、この構文から離れてはほとんど使われないのである⁵。BCCWJの中では、「尻目」という語が使われている全133例のうち6例が「尻目にかかる」という組み合わせで使われていて、残りの127例はすべて「地図をたよりに構文」との組み合わせで使われていた。

こうした特定の構文の中でしか使われない語（形態素）はクランベリー語（形態素）と呼ばれることがある⁶。このような表現に関しては、その場その場で規則を適用して作られているわ

⁵ 村木（1983）によれば「尻目にかかる」という表現がもともになっているそうだが、母語話者でも知らない人が多いようである。

⁶ cranberry という語を複合語として見たとき、berry の意味はわかるが cran の意味はわからないことから、クランベリー形態素（cranberry morpheme）と呼ばれる。これを統語的構文に拡張したクランベリー語については Taylor（2012）第4章に多数例が挙げられている。

けではなく、「Xを尻目に」という形でまるごと記憶されていると考えられる。

同様に、「皮切り」「機」といった語も同様に、「Xを皮切りに」「Xを機に」という表現でしかほとんど使われることがない。

7.1.2 イディオム事例

また、「地図をたよりに」構文の事例の中には、イディオム・慣用句に関係した事例も多い。村木(1983)は、この構文の事例はたいてい「XをYにして」という形がもとになっているものの、そうでない事例も存在すると指摘し、慣用句がもとになっている次のような例を挙げている。

- (60) 紋切り型の大義名分を楯に、行政当局による一切の監督権を否定する。
- (61) 幹部が権力をカサに、女性をかどわかしていながら.....
- (62) 世界経済の荒波を横目に、好調を続けた西ドイツ。
- (63) 臨調としても改正案は次期通常国会で審議されとの方向を念頭に、経営形態変更の手順をまとめることにした。

(村木 1983: 269)

それぞれ、「楯にとる」「カサにきる」「横目にみる」「念頭におく」がもとになっているため、「XをYにして」という形に置き換えることができない。村木によると、慣用句ではない「学資を親にたよって大学に通っている」の「たよって」の部分を省略することはできないが、これは「親にたよる」という表現が慣用句ではなく「自由な語結合」だからである(村木 1983: 269)。ただし、慣用句なら自由に動詞を省略できるわけではないという点を指摘しておく必要がある。たとえば「Xを小耳にはさむ」は慣用句だが、「Xを小耳に」という言い方はできない。同じく「Xを勘定に入れる」「Xを肝に銘じる」「Xを煙に巻く」といった慣用句からそれぞれ「Xを勘定に」「Xを肝に」「Xを煙に」といった表現を作ることはいできない。慣用句がもとになった慣習化した事例がいくつかあるというのは事実だが、慣用句なら自由に作れるというわけではない。したがって、こうした表現についても、「Xを盾に」「Xをカサに」といった組み合わせそのものがまるごと記憶されていると考えられる。

さらに、ある名詞が「地図をたよりに」構文のYの位置で使われた時に、名詞と構文それぞれの情報からだけでは予測できないような特徴を持つことがある。つまり構文の事例が、語と構文スキーマの組み合わせからは予測できないイディオムになる場合である。このようなイディオム事例もまた、まるごと記憶される必要がある。「Xをバネに」はそのようなイディオムのひとつだろう。「地図をたよりに」構文と「バネ」という語を十分に知っていても、次の例のように「Xをバネに」という表現が独自の用法を持つということは予測できない。

- (64) 団体戦で道尚志が3位に入った春の全国選抜大会では、1勝しかできなかった。その悔しさをばねに、2人は毎日約5キロの走り込みで脚力とスタミナを強化、昨年は初戦で

敗退したインターハイで4強入りを果たした。

(北海道新聞、BCCWJ から)

このように「X をバネに」は記憶の単位となっている。さらに、X の部分を埋めた「悔しさをバネに」という表現もかなり定着していて、多くの場合まるごと記憶されているのではないだろうか。

その他、「X をダシに」「X をエサに」「X を糧に」といった表現もイディオムとなっている。

(65) アメリカの政治の中心であるホワイトハウスは、万人憧れの聖地。この聖地をダシに、大統領自らがこの人とは思ふ目ぼしい企業家や著名人の党協力者をお茶や食事のパーティーに招待し、寄付金を募る。
(『寝ても覚めても本の虫』)

(66) 釈放を餌に、なにかの役目を押しつけるつもりでいると見るのが自然だった。

(『Twelve Y.O.』)

さらに、「X を舞台に」という表現も、よく観察すると独自の用法で使われていることがわかる。次の例に見られるように、フィクション作品を紹介するときの決まった言い方として定着しているのである。

(67) 神秘的な禁断の地チベットを舞台に、若き日のダライ・ラマと伝説の登山家 の魂の交流を描いた、ロマン溢れるヒューマン・ドラマ。
(Yahoo! ブログ)

(68) 千九百三十六年、スペインの小さな村を舞台に少年と老教師との触れ合い を、スペイン内戦という現実を背景に悲しくも美しく描く。
(『TV ガイド』)

このような特徴は「地図をたよりに」構文の抽象的な知識と、構文から離れた「舞台」という語彙項目の知識だけでは予測できない。この意味で、こうした表現もイディオム事例に数えられる。このような事例を含めると、「X を Y に、S」の Y に特定の語が入った慣習的事例は数え切れないほど多いかもしれない。

7.2 動機付け

「X を尻目に」「X を皮切りに」といった、この構文でしか使われない語 (クランベリー語) を含んだ事例について述べた。日本語におけるクランベリー語の例として、「何の変哲もない」という表現に出てくる「変哲」が挙げられる。現代日本語では「変哲」がこの表現を離れて使われることはほとんどないので、「何の変哲もない」という表現を、部分を組み合わせて作っているわけではないと考えられる。

野中 (2012) は「何の変哲もない」が「何の X もない」という形の一事例であるということに目を向けている。「何の違いもない」「何の変化もない」「何の特徴もない」「何の面白味もない」といった表現は、それぞれよく使われる言い方である。その共通点として抽出された「何の X もない」というスキーマが「何の変哲もない」という表現を支えていると考えられるので

ある。

まると記憶された表現でも、このように言語知識のネットワークの他の部分と何らかの関係を持つことによって習得しやすくなり、記憶が支えられる。この例では「何のXもない」というローカルな構文とスキーマ-事例の関係を持っていることによって「何の変哲もない」という単位が支えられていると考えられる。このように一般的なスキーマがまると記憶された表現を支えることは、「動機付け」の一例である。言語の単位が他から孤立して存在することはない。Taylor (2004) はこれを生態学 (ecology) になぞらえ「ニッチ」を与えられていると表現している (Taylor 2004: 58)。使用基盤モデルの観点から見れば、言語に見られる体系性の実質は、言語単位どうしのこのようなつながりなのである。

野中 (2012) の指摘するように、「何の違いもない」「何の特徴もない」といった表現は「何の変哲もない」と形だけではなく意味的上でも似ている。「何の変哲もない」という表現はこの共通点に動機付けを与えられ、ひとつの単位として言語の中に生息しているのである。

以上のような観点から前節で挙げた慣習的な事例を検討すると、第4節・第5節で論じたスキーマとの関係が見えてくる。「Xを皮切りに」「Xを機に」といった慣習的事例はタイミングスキーマに動機付けを与えられていると言える。

さらに、(60-63) のような慣用句がもとになった事例に関しても同様である。「Xを楯に」「Xをカサに」といったものは成立要因スキーマに動機付けられていると言える。また「Xを念頭に」という表現は5節で論じた保持を表すタイプに動機付けられていると考えられる。これらの表現はその場その場でスキーマを適用して作られたものではないが、それでも「地図をたよりに」構文の中間レベルのスキーマに沿っているということである。「地図をたよりに」構文によく合う意味の慣用句だからこそ、もとの形の違いを乗り越えて「地図をたよりに」構文の事例となりえているのである。

慣用句の中でも「小耳にはさむ」「肝に銘じる」といったものは、「Xを小耳に」「Xを肝に」のように「XをYに」という形にできないと述べた。このような表現がないことは、より上位のスキーマによる動機付けがないからだと考えることによってある程度説明できる。

さらに興味深いのは、「Xを横目に」「Xを尻目に」という事例である。これらの表現は今までに述べたどの生産的なスキーマにもあてはまらないが、類似した慣習的表現がいくつかある。「Xをそっちのけに」「Xをよそに」「Xを抜きに」という表現である。

(69) …アポロの月着陸をそっちのけに、TAについて議論する人々がいることに驚いた。

(『科学技術を市民にどう伝えるか』)

(70) そんなあたしの憂いをよそに、タカチは柱に凭れかかった。(『透明な貴婦人の謎』)

(71) …今やスペイン産ワインを抜きにワインを語れない状況だ。(『世界路地裏・食紀行』)

これらの表現の表す意味は非常によく似ている。次のような共通点を持つ。これを「そっちのけスキーマ」と呼ぶことにする。

(72) そっちのけスキーマ

「XをYに、S」において、Xの指示する物や事存在がSに影響してもおかしくないが、行為者はXの指示対象に注目せずにSの行為を行う。

たとえば(69)では、アポロの月面着陸があったにもかかわらず、それに注目せず、TAについて議論している。このスキーマには少なくとも「横目」「尻目」「そっちのけ」「よそ」「抜き」という5つの事例がある。これらの事例はそれぞれまるごと記憶された表現であるが、これらの共通点から抽出されたスキーマが、こうした形と意味の互いによく似た表現の知識を支えていると考えられる。

このように、多数の慣習的事例を考慮すれば、「地図をたよりに」構文は最上位のスキーマ、中間レベルのスキーマ、そしてまるごと記憶された事例が共存するネットワークとして捉えることが妥当である。

8. まとめ

第2節では先行研究の概観として、Yに非飽和名詞が現れること、そしてYの名詞と主節の関係を重視する寺村(1992)の立場とYの名詞と主節の項との関係を重視する三宅(2000)の立場があることを述べた。第3節では三宅(2000)の立場は維持しがたいことを示し、寺村(1992)の説でも説明できない例があることを指摘した。第4節と第5節では、成立要因、タイミングという中間レベルの構文の意味スキーマを想定することでその問題が解決できることを示した。第6節では保持を表すとされるタイプについて述べ、Yに身体部位名詞または場所を表す非飽和名詞が使われた場合に、「XがYにある」という解釈になるということを明らかにした。第7節ではYに特定の名詞が入った形でまるごと記憶された事例が多数あることを指摘し、それらの事例が中間レベルのスキーマに動機付けられていることを示した。

抽象的な規則だけでは説明できない多くの事実があり、それを捉えるためにはより具体的なレベルの言語知識に目を向ける必要があることを主張した。「地図をたよりに」構文の全体像は、さまざまな抽象度のレベルの単位が共存する構文ネットワークとして捉えられる。

こうした状況は、他の多くの文法項目についても同様なのではないだろうか。文法の知識とされるものは抽象的な(最上位の)スキーマだけからなるのではなく、具体的な表現とそこから抽出されたさまざまなスキーマの全体からなるネットワークであると考えられる。

参考文献

- Dubinsky, Stanley and Shoko Hamano (2007) A Window into the Syntax of Control: Event Opacity in *Japanese and English*. *University of Maryland Working Papers in Linguistics*, no. 15. College Park, MD: University of Maryland Dept. of Linguistics.
- 桑平とみ子 (2007) 「「する」と「なる」の省略構文の一考察」久野暲、牧野成一、スーザン G. ストラウス (編) 『言語学の諸相：赤塚紀子教授記念論文集』78-86. 東京：くろしお出版.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar A Basic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009) Constructions and Constructional meaning. Evans and Pourcel (eds.) *New Directions in Cognitive Linguistics*. 225-267.
- Martin, Samuel E. (1975) *A Reference Grammar of Japanese*. Rutland/Tokyo: Charles E. Tuttle Company.
- 三宅知宏 (2000) 「名詞の「飽和性」について」『国文鶴見』35: 89-79.
- 村木新次郎 (1983) 「地図をたよりに、人をたずねる」という言い方. 渡辺実 (編) 『副言語の研究』267-292. 東京：明治書院.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』東京：ひつじ書房.
- 野中大輔 (2012) 「「何の変哲もない」の「変哲」って？」
<http://imogakusei.seesaa.net/article/279141387.html> [2017 年 12 月 4 日アクセス]
- 田窪行則 (1984) 「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12: 89-115.
- Taylor, John R. (2004) The ecology of constructions. In Günter Radden and Klaus-Uwe Panther (eds.), *Studies in linguistic motivation*, 49-73. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press.
- 寺村秀夫 (1992) [1983] 「「付帯状況」表現の成立条件: 「XヲYニ……スル」という文型をめぐって」『寺村秀夫論文集 I 日本語文法編』113-126. 東京：くろしお出版.
- 氏家啓吾 (2017) 「「地図をたよりに」構文と非飽和名詞」『東京大学言語学論集』38: 287-301.
- 山泉実 (2010) 「節による非飽和名詞 (句) のパラメータの補充」東京大学博士論文.
- 山泉実 (2013) 「非飽和名詞とそのパラメータの値」西山佑司編『名詞句の世界』11-27. 東京：ひつじ書房.
- 和氣愛仁 (2000) 「二格名詞句の意味解釈を支える構造的原理」『日本語科学』7, 70-94.

Grammatical Knowledge as a Network: How Best to Describe the “*Chizu-o Tayori-ni*” Construction

UJIIE Keigo

keigo5525@gmail.com

Keywords: Japanese, “*chizu-o tayori-ni*” construction, constructional meaning, usage-based model

Abstract

Among the constructional idioms in Japanese is what I refer to in this paper as the “*chizu-o tayori-ni*” construction, a sentence with a subordinate clause ‘X-o Y-ni’ that lacks a predicate verb. This paper provides a detailed description of this construction.

It is shown that the construction has two major subschemas, each of which has a distinct semantic characteristic that pertains to the relationship between the main clause event and the subordinate clause event: the enabling sense and the timing sense. In addition, it is argued that there are many conventional expressions which instantiate “*chizu-o tayori-ni*” construction, and that higher-level constructional schemas, including the enabling schema and timing schema, provide motivation for these conventional expressions. The “*chizu-o tayori-ni*” construction can therefore be seen as a network that consists of constructions with various levels of abstraction and different degrees of productivity.

(うじいえ・けいご 東京大学大学院)